

令和2年度 大分県食品衛生監視指導計画

計画期間：令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

大分県生活環境部 食品・生活衛生課

目 次

第1章	令和2年度食品衛生監視指導計画	
第1	監視指導に関する事項	
1	監視指導の実施体制等	P 1
2	重点的な監視指導事項	P 2
3	一般的な監視指導事項	P 5
4	監視回数に係る基本的事項	P 6
5	各種一斉取締りの実施に関する事項	P 6
第2	食品等の収去検査等に関する事項	P 7
1	収去検査等の基本的考え方	
2	令和2年度収去検査等計画重点事項	
第3	違反を発見した場合の対応に関する事項	P 8
1	立入り検査時に違反を発見した場合の対応	
2	収去検査の結果、違反を発見した場合の対応	
3	違反の公表	
第4	食中毒等健康被害発生時の対応に関する事項	P 9
第2章	食品等事業者に対する自主的な衛生管理の実施に関する事項	P 10
1	食品衛生管理者・食品衛生責任者の設置	
2	食品等事業者による自主的な衛生管理の推進	
3	H A C C P 導入の推進	
4	と畜場、食鳥処理場設置者による衛生管理の推進	
第3章	関係者相互の情報及び意見交換の実施に関する事項	P 11
1	食品衛生監視指導計画について	
2	監視指導等の結果及び食品検査結果について	
3	県民との情報及び意見の交換の実施	
4	消費者への食品による危害発生防止のための情報提供	
第4章	食品衛生に係る人材の養成及び資質の向上に関する事項	P 12
1	食品衛生監視員、食品検査従事職員、と畜検査員、食鳥検査員等の資質向上	
2	食品等事業者の自主的な衛生管理を担う者の養成及び資質の向上	

別表 1	食の安全安心に係る県庁内各課	P 1 3
別表 2	食品関係営業施設監視指導等の実施体制	P 1 4
	1 食品関係営業施設の監視指導等実施機関とその役割	
	2 収去検査等の実施機関とその役割	
別表 3	業種ごとの年間標準監視指導回数	P 1 6
別表 4	収去検査等計画	P 1 7
	1 令和 2 年度収去検査等計画	
	2 令和 2 年度収去検査等計画 (検査内容別)	
	3 令和 2 年度収去検査等計画 (検査・収去実施機関別)	
別表 5	食品の放射性物質検査	P 2 0

【 参考資料・用語説明 】

1	許可を要する食品関係営業施設数	P 2 1
2	許可を要しない食品関係営業施設数	P 2 2
3	総合衛生管理製造過程承認施設	
4	と畜場及び食鳥処理場	P 2 3
5	大分県の食中毒発生状況	
6	用語説明	P 2 5

第1章 令和2年度食品衛生監視指導計画

第1 監視指導に関する事項

1 監視指導の実施体制等

(1) 食品衛生監視指導計画の策定と監視指導結果の分析・評価

食品・生活衛生課は、全国的な食品等の生産、製造、加工、輸入、流通、販売、等の実態、食中毒等の食品衛生上の危害発生状況を分析、評価し、県内の食品関係施設における食品衛生上の管理状況等の実態を踏まえて食品衛生監視指導計画を策定する。

また、県内で食中毒等の食品衛生上の危害が発生、又は危害が発生するおそれがある場合、県内各保健所や関係自治体、国等と連携し、原因究明や危害の拡大防止対策等を講じるとともに、必要に応じ監視指導計画の変更を行う。

(2) 全庁的な連携

副知事を本部長とし関係部長で構成する「大分県食の安全確保・食育推進本部」は、食に関する総合的かつ効果的な安全施策を推進し、緊急時の迅速な対応をする。

特に、生産段階から消費段階に至る食の安全確保を図るため、緊密に農林水産部等と連携を図る。食の安全安心に係る県庁内の各課は、別表1のとおりである。

(3) 監視指導の実施体制

食品等の監視指導は、県下9箇所の保健所（保健所、保健部）、食肉衛生検査所に配置した食品衛生監視員及びと畜検査員が実施する。

また、大規模若しくは国際認証取得施設における食品製造施設等の監視指導については、県下5保健所に設置した食品衛生監視機動班が実施する。（別表2-1参照）

農畜水産物の生産段階における監視指導は、振興局、家畜保健衛生所が行い、必要により保健所が協力する。

(4) 地域の特性に応じた監視指導の実施

地域ごとに、食中毒の発生状況や危害要因に応じた衛生管理対策推進を中心とした監視指導を実施する。あわせて、輸出水産食品などの取り扱う食品に応じた衛生管理対策推進を中心とした監視指導を実施する。

特に食品衛生監視機動班設置保健所においては、上記地域の特徴を踏まえた監視指導を行う。

(5) 国及び他の都道府縣市との連携

大規模又は広域的な食中毒等が発生した場合や、健康食品による健康被害が発生した場合、輸入食品に係る違反事例が発見された場合等、厚生労働省、農林水産省、消費者庁、他自治体との連携が必要な際には、迅速な情報収集と情報共有に努めるとともに、食品衛生法等の一部を改正する法律(平成30年法律第46号、以下「法改

正」という)の施行に伴い設置される広域連携協議会の構成員として、適正な対応に努める。また、隣接する自治体との緊密な連携体制を構築し、維持する。

(6) 試験検査の実施体制

収去検査等は、保健所の検査室、衛生環境研究センター、登録検査機関で役割分担を踏まえ実施する。

各試験検査実施機関に対して、信頼性確保部門による試験検査実施状況に関する内部点検の定期的な実施、外部精度管理調査の定期的な受検等、これらの機関の信頼性確保のための取り組みを行う。(別表2-2参照)

また、登録検査機関に検査を委託する場合には、委託契約に基づき、業務の受託者としての業務の適正な管理を求め、必要に応じて検査の実施状況の確認、精度管理の状況を確認する。

2 重点的な監視指導事項

(1) HACCPの普及・推進

食中毒の発生防止及び食品衛生法に違反する食品の製造等の防止を図るため、国際的な衛生管理の手法であるHACCP(危害分析・重要管理点方式)を普及させる。事業者に対してHACCPに関する講習会を開催し、その導入と実行を促す。

併せて、事業者に対して現地指導を行い、事業者の自主的衛生管理の定着を推進する。

また、地域のHACCP指導者を育成し、官民一体となってHACCP指導体制を強化する。

(2) 食中毒発生防止対策

① 小規模事業者におけるHACCPに沿った衛生管理の導入

法改正により、令和3年6月までにすべての食品取扱事業者へHACCPの導入を行わなければならないことから、関係機関と連携しながらHACCPの考え方に基づいた衛生管理の導入を推進する。

② 食肉の生食等による食中毒発生防止対策

鶏肉の生食は法律上禁止されていないが、そのリスクは高く、全国的にも食中毒の主要な発生原因となっている。鶏肉の生食や加熱不足による食中毒を防止するため、食鳥処理業者、食肉販売業者、飲食店等の監視指導及び消費者への啓発などを行い、鶏肉の生食等による食中毒発生防止対策を行う。

また、あわせて腸管出血性大腸菌の食中毒発生防止対策として肉類の生食や生焼けは重症化する可能性があることをふまえ、食肉販売業者、飲食店等の監視指導及び消費者への啓発などを行う。

③ ふぐ食中毒発生防止対策

ふぐ食中毒の発生防止のため、食品衛生法及び大分県食の安全・安心推進条例に基づき、ふぐ処理登録者に対する指導やふぐを取り扱う飲食店、魚介類販売業及び魚介類加工業に対する監視指導を行う。

また、消費者の家庭での自家調理が原因となるふぐ食中毒の発生防止のため、消費者への啓発を行う。

④ 食物アレルギーによる事故対策

アレルギー物質を含む食品による健康被害の発生を未然に防止するため、食品等事業者に対し、適正表示の徹底について指導するとともに、旅館・ホテル等へ、特定原材料を含む食材を使用する際の注意喚起を行う。

(3) 野生鳥獣肉（ジビエ）の衛生確保対策

全国では、野生鳥獣肉を原因とした E 型肝炎ウイルス感染事例や旋毛虫（トリヒナ）食中毒が発生しているため、野生鳥獣肉を取り扱う食肉処理施設に対して HACCP に沿った衛生管理の導入を指導する。

(4) 食品表示適正化の推進

平成 27 年 4 月に施行された食品表示法に基づき、表示に関する講習会や立入指導を入念に行い、食品等事業者に対して適切な食品表示の指導を行う。また、食品の偽装表示や不適正表示の発生防止を図るため、これまで取り組んできた食品関係施設に対する合同立入調査、食品偽装表示対策チームによる調査・指導を継続し、食品等事業者の食品表示の適正化に取り組む。

(5) リスクコミュニケーション

食品事業者と消費者の良好な関係を構築するため、食品事業者が自主的に食品に関する情報を消費者等と共有（意見交換会、消費者説明会等）し、食品事業者の透明性を高める取り組みなどを支援する。

(6) 輸入食品の安全確保

輸入食品の安全確保のため、九州各州市と緊密に情報交換を行う。また、違反事例等が発見された場合は、監視指導を強化する。

(7) 食品の放射能汚染対策

放射性物質の基準を超える疑いのある食品が県内に流通した場合、緊急の放射性物質検査を実施する。

(8) 食肉・食肉製品、乳・乳製品、卵・卵加工品、水産食品及び農産物の製造加工施設の監視指導

食品衛生上の危害発生状況等を踏まえ、食品供給工程（フードチェーン）の各段階において次の事項を重点的に、監視指導を行う。

食品群	監視指導事項
食肉・食肉製品	【解体処理段階】 ○健康な獣畜又は家きんのと畜場又は食鳥処理場への搬入の推進 ○獣畜の病歴を踏まえたと畜検査 ○枝肉、中抜きとたい等の微生物検査による衛生的な処理の検証 ○と畜場における動物用医薬品等の投与歴を踏まえた、健康な獣畜を含めた残留物質検査

	<p>○認定小規模食鳥処理施設における処理可能羽数の上限の遵守の徹底</p> <p>【製造及び加工段階】</p> <p>○食肉処理施設における微生物汚染の防止の徹底</p> <p>○製造又は加工に係る記録の作成及び保存の推進</p> <p>○食品等事業者による原材料受け入れ時の残留抗生物質及び残留抗菌性物質の検査の実施等による原材料の安全性の確保の推進</p> <p>【貯蔵、運搬、調理及び販売段階】</p> <p>○枝肉及びカット肉の流通管理（保存温度、衛生的な取扱い等）の徹底</p> <p>○加熱調理の徹底</p>
乳・ 乳製品	<p>【採取段階】</p> <p>○原材料受け入れ時の残留抗生物質及び残留抗菌性物質の検査の実施等による原材料の安全性の確保の徹底</p> <p>【製造及び加工段階】</p> <p>○製造過程又は加工過程における微生物汚染の防止</p> <p>○製造又は加工に係る記録の作成及び保存の推進</p> <p>○食品等事業者による飲用乳についての微生物等に係る出荷時検査の徹底</p> <p>【貯蔵、運搬、調理及び販売段階】</p> <p>○流通管理（保存温度、衛生的な取扱い等の徹底）</p>
卵・ 卵加工品	<p>【採取段階】</p> <p>○新鮮な正常卵の受け入れの徹底</p> <p>【製造及び加工段階】</p> <p>○洗卵時及び割卵時の汚染防止の徹底</p> <p>○製造又は加工に係る記録に作成及び保存の推進</p> <p>○汚卵、軟卵及び破卵の選別等検卵の徹底</p> <p>【貯蔵、運搬、調理及び販売段階】</p> <p>○低温保管等温度管理の徹底</p> <p>○破卵等の検卵の徹底</p> <p>○残留動物用医薬品、微生物等の検査</p>
水産食品 ・	<p>【採取段階】</p> <p>○二枚貝等の貝毒等に関する検査結果に基づく出荷の自粛</p>

水産加工品	<ul style="list-style-type: none"> ○漁港等の水揚げ場における衛生的な取扱いの徹底 ○有毒魚介類等の排除の徹底 ○食中毒の原因となる寄生虫対策の徹底 ○養殖魚介類への動物用医薬品の適正使用の徹底 <p>【製造及び加工段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生食用カキの採捕海域等の適正表示の徹底 ○フグ取扱い有資格者による衛生的な処理の徹底 <p>【貯蔵、運搬、調理及び販売段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○残留動物用医薬品、微生物等の検査 ○水産加工品の流通管理（保存温度、衛生的な取り扱い等）の推進 ○加熱を要する食品についての加熱調理の徹底 ○有毒魚介類等の市場からの排除の徹底
農産物・農産物加工品	<p>【採取段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○残留農薬検査の実施及び食品事業者等による出荷時検査の推進 <p>【製造及び加工段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生食用野菜、果実等の衛生管理の徹底 ○食品等事業者による原材料受入れ時の安全性の確保の推進 <p>【貯蔵、運搬、調理及び販売段階】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○残留農薬、汚染物質等の検査の実施 ○穀類、豆類等の運搬時のかび毒対策の推進 ○有毒植物、毒キノコ等の市場及び農産物販売所からの排除の徹底

3 一般的な監視指導事項

食品関係施設に対して、設備の点検及び食品の取扱いに関し、食品による危害発生のリスクに応じた措置が講じられているか、監視指導を行う。

対象施設	監視指導事項	実施内容
<ul style="list-style-type: none"> ・食品衛生法に基づく営業許可施設 ・大分県食品衛生条例、大分県食品行商取締条例に基づく営業許可又は届出施設 ・食品販売施設等 ・食鳥処理場（小規模） ・対米・対EU輸出食品取 	<ul style="list-style-type: none"> ・法等に基づく施設基準、管理運営基準、表示の基準等に適合することの確認・指導 ・一般的衛生管理事項の実施状況（記録の作成、保存含む）の確認・指導 ・HACCPの考え方を取り入れた衛生管理の導入指導 	<p>ア 確認・指導事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使用原材料の点検 ・温度管理の徹底 ・微生物汚染防止対策 ・添加物の適正使用 ・適正な食品表示の徹底 ・自主検査の推進 ・製造・加工等記録の

扱い施設 ・その他、食品等関係施設		作成及び保存
・と畜場	<ul style="list-style-type: none"> ・法等に基づく施設基準、管理運営基準等についての適合及びその遵守の確認・指導 ・一般的衛生管理事項の実施状況（記録の作成、保存含む）の確認・指導 ・HACCPに基づく衛生管理の導入指導 	イ 試験検査

4 監視回数に係る基本的事項

食品等事業者の業種ごとの施設への監視指導について、過去の食中毒の発生頻度、製造・調理・流通される食品の流通の広域性、規模、取扱い食品の特殊性などを考慮して、4段階に分類し年間の標準監視回数を定める。

令和2年度の年間標準監視指導回数は別表3（17ページ）に示す。

5 各種一斉取締りの実施に関する事項

食中毒が多発する夏期、食品の流通量が増加する年末及び県内の観光地においては、春・秋の行楽シーズンに、大型食品販売店、宿泊施設、弁当仕出し屋などの大型調理施設を重点的に立ち入り、監視指導を実施する。

ふぐシーズンが始まる時期にふぐ取扱い施設を重点的に立ち入り、ふぐ中毒の防止に努める。

夏期食品一斉取締り	7月1日～7月31日
夏期食品表示一斉取締り	7月1日～7月31日
食品衛生月間	8月1日～8月31日
年末食品一斉取締り	12月1日～12月28日
年末食品表示一斉取締り	12月1日～12月28日
観光・行楽地監視	4月～5月 9月～10月
ふぐ中毒防止強化月間	10月1日～10月31日

第2 食品等の収去検査等に関する事項

1 収去検査等の基本的考え方

収去検査は県特産食品、県内広域に流通する食品及び消費者の利用頻度が高く、食中毒の原因となりやすい食品について重点的に実施する。

検査項目は「食品衛生法に基づく食品、添加物等の規格基準」・「衛生規範」及び「大分県食品衛生指導基準」について実施する。

令和2年度の収去検査等計画は、食品衛生上の危害の発生状況、過去の収去検査結果等を考慮し別表4のとおりとする。

また、食品製造施設における、危害要因・重要管理点の妥当性を確認する。

収去検査及び拭き取り検査を活用して、科学的根拠に基づいたHACCPの衛生管理を定着させ、当該施設の通常の衛生管理及び安全管理の強化につながる指導を行っていく。

2 令和2年度収去検査等計画重点事項

- (1) 海外から輸入される農畜水産食品、加工食品等を対象に残留農薬、残留動物用医薬品の検査
- (2) 県内で生産される農畜水産食品を対象に残留農薬、残留動物用医薬品等の検査
- (3) 県内で製造・加工・販売される食品を対象に食品添加物、成分規格等の検査
- (4) 食中毒の原因となりやすい食品を対象に食中毒原因微生物の検査
- (5) 県内で製造加工される食品を対象に表示義務のあるアレルギー物質（落花生等）の検査
- (6) 食品製造工程上の危害要因を確認するための食中毒原因微生物等検査

第3 違反を発見した場合の対応に関する事項

1 立入り検査時に違反を発見した場合の対応

(1) 施設基準違反等について

立入り検査で、食品営業関係施設が食品衛生関係法令に規定された施設基準、衛生管理運営基準に違反している事実を発見した場合、極力その場において改善指導を行うとともに、違反が軽微な場合であって直ちに改善が図られるもの以外の法違反については食品衛生指導注意票等を交付し書面での改善指導を行う。

違反により、健康被害の発生、違反食品が製造されるおそれがある場合等は、食品衛生上の危害を防止するために、その施設の改善命令や営業停止処分等の措置を取る。

(2) 違反食品等について

立入り検査で、不衛生な食品や食品衛生法で規定された食品、添加物等の規格基準に違反した食品、表示に不備がある食品等が発見した場合は、当該食品等が販売の用に供され、又は営業上使用されないよう、必要に応じ関係自治体と連携して廃棄又は回収等の措置を速やかに講じるとともに、食品衛生法に基づく廃棄命令、営業停止、施設の改善命令等を行う。

また、悪質な事例については告発を行う。

2 収去検査の結果、違反を発見した場合の対応

検査の結果、違反が発見された場合は、前記1-(2)と同様な措置を取る。

違反食品の生産、製造、加工、輸入等を行った施設が大分市や他の自治体に属する場合は、速やかに関係自治体及び国に情報提供し、連携して違反食品等の流通防止対策、再発防止対策を講じる。

また、違反食品等を製造、加工等した者の検査の能力等からみて、継続的に当該者の製造、加工等する食品等の検査が必要と判断される場合には、積極的に食品衛生法第26条第1項に基づく検査命令を行う。

3 違反の公表

食品衛生上の危害の状況を明らかにし、健康被害拡大防止のため、食品衛生関係法令又は法令に基づく処分に違反した者(原則として当該違反により書面による行政指導の対象となる者を含み、違反が軽微であって、かつ当該違反について直ちに改善が図られた者を除く)の名称、違反の内容、対象食品、対象施設等を県庁ホームページ、マスコミ発表等の手段を用い、随時公表する。

第4 食中毒等健康被害発生時の対応に関する事項

食中毒等健康被害発生時の対応については、食品衛生法の規定並びに大分県の「食中毒対策要綱」「毒劇物等を原因とする食中毒対策要領」に基づき、原因究明及び健康危機管理対策を実施する。

発生時の対策としては、必要に応じ、薬事監視、医療監視、水道担当部局等関係部局及び関係自治体への迅速な情報提供及び当該関係部局との密接な連携を図るとともに、被害拡大と再発防止のため、迅速な原因究明調査の実施、必要な情報の公表等を行う。

食中毒予防の観点から、食中毒発生状況に関する食品等事業者及び県民への情報提供を行う。

また、いわゆる健康食品による健康被害発生時においても、原因究明を迅速に行い、国（厚生労働省及び消費者庁）に調査経過、結果をすみやかに報告するとともに、必要に応じて公表を行う。

第2章 食品等事業者に対する自主的な衛生管理の実施に関する事項

県内（大分市を除く）の製造者、加工者、販売者等の食品等事業者に対して、必要に応じて農林水産部局と連携を図りながら、次の事項を指導する。

1 食品衛生管理者・食品衛生責任者の設置

食品衛生法第10条〔添加物等の販売等の制限〕の規定により厚生労働大臣が定めた添加物その他製造又は加工の過程において特に衛生上の考慮を必要とする食品又は添加物であって政令で定めるものの製造又は加工を行う営業者*は、食品衛生管理者を設置するとともに、食品衛生管理者が適切にその職責が果たされるよう、講習会や情報提供を実施し、食品衛生管理者の意見を尊重するよう努めなければならない。

また、営業者に対しては、食品衛生管理者を置かなければならない営業施設以外であっても、その製造、加工、調理等を自主的に管理する者として、食品衛生責任者等の食品衛生に関して相当の知識を有する者を置き、食品衛生管理に当たらせるよう指導するとともに、必要な知識を習得するための講習会等を実施する。

※食品衛生管理者の設置を必要とする食品

全粉乳、加糖粉乳、調製粉乳、食肉製品、魚肉ハム、魚肉ソーセージ、放射線照射食品、食用油脂、マーガリン、ショートニング、添加物

2 食品等事業者による自主的な衛生管理の推進

食品等事業者の責務である自主検査、原材料の安全性確認等の実施を進めるとともに、記録の作成及び保存の推進を図る。

また、衛生管理に係る基準、食品等の適正表示の実施、食品等に係る基準違反及び苦情の事例等についての講習会等を開催するとともに、県庁ホームページ等を活用した情報提供を図る。

また、食品等事業者による食品衛生の向上に係る自主的な活動を促進するため、(一社)大分県食品衛生協会に対し助言、指導を行う。

3 HACCP導入の推進

食品製造業者及び加工業者に対して、HACCPに基づく衛生管理の普及を図り、導入に向けて指導・助言を行う。

また、その他の食品等事業者に対し、取り扱う食品の特性等に応じた取組（HACCPの考え方を取り入れた衛生管理）について周知・助言を行う。

4 と畜場、食鳥処理場設置者による衛生管理の推進

と畜場法に基づく衛生管理責任者、作業衛生責任者及び食鳥処理法に基づく食鳥処理衛生管理者が、適切にその職責が果たされるよう、講習会や情報提供を実施するとともに、設置者等については、衛生管理責任者等の意見を尊重するよう、意識向上を図る。また、HACCPに基づく衛生管理の導入推進を図る。

第3章 関係者相互の情報及び意見交換の実施に関する事項

1 食品衛生監視指導計画について

食品衛生監視指導計画の策定や年度途中で監視指導計画を変更する場合は、県庁ホームページ等を利用したパブリックコメント、大分県食品安全推進県民会議及び消費者等を対象とした意見交換会等で県民から意見徴収し、監視指導計画に反映させる。

2 監視指導等の結果及び食品検査結果について

前年度における監視指導の実施結果及び食品等の収去検査結果については令和2年6月末までに、ホームページに掲載する。

3 県民に対する意見交換と情報提供の実施

- (1) 大分県食品安全推進県民会議の開催
- (2) 食の安全・安心に関する出前講座や意見交換会の実施
- (3) 県のホームページで食品による危害発生防止のための情報提供
- (4) 大分県食中毒注意報発令要領に基づき「夏季食中毒注意報」及び「ノロウイルス食中毒注意報」を発令
- (5) 安全・安心メールによる食の緊急情報の発信
- (6) フェイスブックを活用した消費者等からの情報収集や食中毒防止情報の提供
- (7) 保育所、幼稚園、小学校を対象とした食の安全こども教室の実施
- (8) ふぐ、腸管出血性大腸菌、ノロウイルス食中毒等の防止のための時期に応じた啓発チラシ・ポスターの配布
- (9) 食中毒防止月間等での街頭啓発活動
- (10) 情報誌、テレビ、メディア等を利用した情報発信
- (11) あらうんジャー、手洗いマンボ、手洗いチェッカー等を利用した、対象に応じた効果的な食中毒予防のための手洗い指導・啓発の実施

第4章 食品衛生に係る人材の養成及び資質の向上に関する事項

食品衛生法第2条第1項の責務規定の内容も踏まえて次に掲げる事項等、人材の養成及び資質の向上を図る取組を実施する。

1 食品衛生監視員、食品検査従事職員、と畜検査員、食鳥検査員等の資質の向上

監視指導に従事する食品衛生監視員、と畜検査員及び食鳥検査員及び食品検査従事職員に対して技術研修、法令の内容等に係る教育の充実を図る。

- (1) 食品衛生監視員・と畜食鳥検査員・狂犬病予防員研究発表会の実施
- (2) と畜検査員・食鳥検査員研修会の実施
- (3) 健康危機管理（感染症・食中毒）研修会・シミュレーションの実施
- (4) 体感型研修等監視指導スキルアップ研修の実施
- (5) HACCP関係講習会への派遣
- (6) 対米、対EU輸出水産食品に係る指名食品衛生監視員養成講習会への派遣
- (7) 国等が実施する研修会への派遣
- (8) リスク学に関する研修会への派遣
- (9) 食品関係学会への派遣
- (10) 米国農務省による食肉検査に関する海外政府職員研修への派遣

2 食品等事業者の自主的衛生管理を担う者の養成及び資質の向上

- (1) 食品衛生責任者等の養成
（一社）大分県食品衛生協会が実施する食品衛生責任者の養成講習会及び実務講習会の支援
- (2) と畜場法に基づく衛生管理責任者及び作業衛生責任者の養成
必要に応じ、衛生管理責任者及び作業衛生責任者講習会を実施
- (3) 食鳥処理法に基づく食鳥処理衛生管理者講習
必要に応じ、食鳥処理衛生管理者の講習会を実施
- (4) ふぐ処理者の講習会
大分県食の安全・安心推進条例に基づき知事が指定する、ふぐの処理に関する講習会を支援
- (5) 食中毒防止に関する講習会
食中毒の発生防止を図るため、各保健所において、食品等事業者、従事者及び集団給食施設の調理従事者に対し、衛生講習会の実施
- (6) 食品等事業者自らが行う食品衛生管理者等の養成活動の推進
食品等事業者自らが行う食品安全に係る知識及び技術を有する者の養成及び資質の向上を推進し、必要に応じ講師の派遣
- (7) 食品衛生推進員及び食品衛生指導員の教育
（一社）大分県食品衛生協会と連携し、食品衛生推進員及び食品衛生指導員の育成に関する研修会を支援

別表1 食の安全安心に係る県庁内の各課

部 名	課 名	食の安全安心に係る部分
企画振興部	広報広聴課	広報及び広聴に関すること
福祉保健部	薬務室	医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律の施行に関すること
	健康づくり支援課	健康づくり対策の総合企画及び連絡調整に関すること 健康増進法の施行に関すること
生活環境部	県民生活・男女共同参画課	不当景品類及び不当表示防止法の施行に関すること 消費生活・男女共同参画プラザに関すること
	私学振興・青少年課	私学の給食や生徒寮に関すること
	食品・生活衛生課	食品安全基本法及び食品衛生法の施行に関すること と畜場法及び食鳥処理法の施行に関すること
	環境保全課	水道に関すること
商工観光労働部	工業振興課	食品産業企業会に関すること
	商業・サービス業振興課	県産品の販路開拓及び開発促進に関すること
	観光局観光政策課	食を通じた観光と地域づくりに関すること
農林水産部	地域農業振興課	農薬・肥料の取締りに関すること 土壌汚染に関すること 食品表示法（品質事項）に関すること
	農地活用・集落営農課	米・麦・大豆の生産・流通に関すること
	おおいたブランド推進課	野菜・果樹の流通に関すること
	園芸振興課	野菜・果樹・花き・特用作物の生産に関すること
	畜産振興課	畜産物の生産及び流通に関すること
	畜産技術室	飼料安全に関すること
	林産振興室	特用林産物の生産、流通に関すること
	森との共生推進室	野生鳥獣被害防止対策に関すること
	漁業管理課	水産物の流通に関すること
	水産振興課	養殖業に関すること
教育庁	体育保健課	公立学校の給食や食に係る指導に関すること
警察本部	生活環境課	食の安全に係る捜査に関すること

別表2 食品関係営業施設監視指導等の実施体制

1 食品関係営業施設の監視指導等実施機関とその役割

部署	担当業務
食品・生活衛生課	ア 監視指導計画及び大分県で実施する施策の策定及び公表 イ 県民への食品衛生に関する情報の提供 ウ 県庁内関係部局及び他自治体との連絡調整
東部保健所 国東保健部 中部保健所 由布保健部 南部保健所 豊肥保健所 西部保健所 北部保健所 豊後高田保健部	ア 食品衛生法、大分県食品衛生条例及び大分県行商取締条例に基づく営業許可施設の監視指導 イ 違反食品、苦情食品に係る調査 ウ 食中毒（疑いを含む。）に係る調査 エ 営業者等及び消費者への衛生講習会の実施及び食品衛生に関する情報提供 オ 食品営業施設におけるHACCPの考え方を取り入れた衛生管理推進のための研修及び実地指導 カ 食品表示法に基づく食品表示の指導・調査 キ 認定小規模食鳥処理場の監視指導 ク 大規模食品製造施設及び国際認証取得施設（ISO、FSSC、SQF等）の監視指導 ケ 対EU輸出水産食品取扱認定施設の監視指導
食肉衛生検査所	ア と畜検査の実施 イ と畜場の監視指導 ウ と畜場に併設する食肉処理施設の監視指導

2 収去検査等の実施機関とその役割

部署	担当業務
食品・生活衛生課	ア 監視指導計画（収去検査を含む。）の策定及び公表 イ 収去検査結果に基づく行政処分の公表 ウ 収去検査結果についての県庁内関係部局及び他自治体との連絡調整
保健所、保健部 （食品衛生担当）	ア 収去検査検体の採取 イ 違反食品、苦情食品及び食中毒（疑いを含む。）に係る検体の採取 ウ 検査結果の通知及び指導
保健所（検査担当） 東部保健所 豊肥保健所 北部保健所	ア 収去検査検体の検査 食品に係る細菌検査 イ 違反食品、苦情食品及び食中毒（疑いを含む。）に係る検体の検査
衛生環境研究センター	ア 収去検査検体の検査 食品に係る残留農薬、残留動物用医薬品、食品添加物等の理化学検査及び微生物検査等 イ 違反食品、苦情食品及び食中毒（疑いを含む。）に係る検体の検査
食肉衛生検査所	ア と畜検査及び食鳥検査に係る精密検査 イ と畜検査に係る抗生物質等の残留動物用医薬品の簡易検査 ウ T S E のスクリーニング検査 エ 検査結果の通知及び指導

別表3 業種ごとの年間標準監視指導回数

ランク	監視回数	対象施設
A	年3回以上	対米対EU輸出水産食品取扱認定施設
B	年2回以上	食品衛生法に基づく大規模製造業者（製造・調理に携わる従業員数が50名以上の施設）
C	年1回以上	前年度、規格基準違反の食品を製造した施設
		前年度、食中毒を発生させた施設
		前年度、健康被害に係る苦情発生原因施設
		食品衛生法に基づく小規模製造業（製造・調理に携わる従業員数が50名未満の施設）
		大分県食品衛生条例に基づく製造業
		総合衛生管理製造過程承認施設
		と畜場・食鳥処理場（認定小規模）
		前年度、衛生規範・大分県食品衛生指導基準等に基づく収去検査で「不良」と判定された食品製造施設
D	2～6年に1回又は実情に応じて	飲食店
		大分県行商取締条例に基づく施設 魚介類の行商等
		食品衛生法に基づく販売店
		給食施設（学校等：学校、幼稚園、保育園、入所通所型老人福祉施設等）
		上記以外の輸出水産食品取扱登録施設
		グリーンツーリズム施設

別表4 収去検査等計画

1 令和2年度収去検査等計画

検査内容	主な検査対象食品等	検体数	検査機関
残留農薬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県産農産物 40 ・ 輸入農産物 10 ・ 輸入加工食品 10 	60 輸入(20)	衛生環境研究センター 登録検査機関
残留動物用医薬品	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県産食肉 30 ・ 輸入食肉 10 ・ 県産養殖魚介類 10 ・ 輸入養殖魚介類 20 ・ 県産鶏卵 10 	80 輸入(30)	衛生環境研究センター
アレルギー物質	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県産加工食品 	10	衛生環境研究センター
食品添加物等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国産加工食品(食肉製品、菓子、漬物等) 60 ・ 輸入加工食品 10 	70 輸入(10)	衛生環境研究センター 登録検査機関
微生物 (食中毒原因微生物等)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 清涼飲料水 10 ・ 県産食肉 30 ・ 輸入食肉 10 ・ 食肉加工品 10 ・ 県産養殖魚介類 20 ・ 輸入養殖魚介類 20 ・ 県産鶏卵 10 	110 輸入(30)	衛生環境研究センター
微生物	<ul style="list-style-type: none"> ・ 牛乳、加工乳 ・ 弁当、そうざい ・ 洋生菓子 ・ 生食用魚介類 ・ 食肉、食肉加工品 ・ 魚介類加工品 ・ 豆腐 ・ ソフトクリーム ・ 冷凍食品 ・ 漬物(浅漬) ・ 生野菜サラダ類 	500	保健所検査室
拭き取り検査	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調理器具 ・ 従業員の手指 	800	保健所
計		1,630 国産食品 (740) 輸入食品 (90)	

2 令和2年度収去検査等計画(検査内容別)

食 品 等	検体数	検査内容別検体数				
		残留農薬	残留動物用医薬品	アレルギー物質	食品添加物等	微生物
魚介類	135		30			105
冷凍食品	10					10
魚介類加工品	80				10	70
肉卵類及びその加工品	170		50		10	110
アイスクリーム類・氷菓	30					30
穀類及びその加工品	105					105
野菜類・果物及びその加工品	125	60			15	50
菓子類	60				10	50
清涼飲料水	10					10
その他の食品	95			10	25	60
牛乳・加工乳	10					10
調理器具・従業員の手指	800					800
合 計	1,630	60	80	10	70	1,410

3 令和2年度収去検査等計画(検査・収去実施機関別)

食 品 等	検体数	検査機関別検体数		
		衛生環境研究センター	保健所	登録検査機関
魚介類	135	70	65	
冷凍食品	10		10	
魚介類加工品	80	10	70	
肉卵類及びその加工品	170	120	50	
アイスクリーム類・氷菓	30		30	
穀類及びその加工品	105		105	
野菜類・果物及びその加工品	125	45	50	30
菓子類	60		50	10
清涼飲料水	10	10		
その他の食品	95	35	60	
牛乳・加工乳	10		10	
調理器具・従業員の手指	800		800	
合 計	1,630	290	1,300	40

別表5 食品の放射性物質検査

検査内容	検査対象食品	検体数	検査機関
放射性物質 (放射性セシウム)	・農林畜水産物 ・乳・乳製品	6	登録検査機関
合 計		6	

※ 検査対象食品の具体例

検査対象食品名	食品の具体例
魚介類	魚類、刺身、カキ等貝類
冷凍食品	食品衛生法で規定されたもの
魚介類加工品	魚肉練り製品、干物、魚介類を主原料にしたそうざい
肉卵類及びその加工品	食肉、鶏卵、食肉製品等
穀類及びその加工品	弁当、おにぎり、寿司、おはぎ、調理パン、めん類、穀類を主原料にしたそうざい
野菜・果物及びその加工品	豆類、いも類及びその他の野菜類、果物、豆腐、漬物、野菜・果物を主原料にしたそうざい、生野菜サラダ類
菓子類	ケーキ、饅頭、菓子パン等
清涼飲料水	ミネラルウォーター、果汁飲料、炭酸飲料

【参考資料・用語説明】

1 許可を要する食品関係営業施設数

平成 31 年 3 月末現在、大分市除く

業 種 名		施設数	業 種 名		施設数	
食品衛生法	飲食店	一般食堂・レストラン	4,881	食品衛生法	マーガリン・ショートニング [*] 製造業	0
		仕出し屋・弁当屋	687		みそ製造業	101
		旅館	709		醤油製造業	32
		その他	2,780		ソース類製造業	17
	菓子(パンを含む)製造業	1,657	酒類製造業		59	
	乳処理業	4	豆腐製造業		90	
	特別牛乳さく取処理業	0	納豆製造業		5	
	乳製品製造業	21	めん類製造業		58	
	集乳業	2	そうざい製造業		558	
	魚介類販売業	1,146	添加物製造業		12	
	魚介類せり売り営業	17	食品の放射線照射業		0	
	魚肉ねり製品製造業	51	清涼飲料水製造業		82	
	食品の冷凍又は冷蔵業	75	氷雪製造業		13	
	かん詰びん詰食品製造業	95	氷雪販売業		14	
	喫茶店営業	1,097	食品条例 ^{*1}		つけもの製造業	582
	あん類製造業	10			こんにやく製造業	86
	アイスクリーム類製造業	37		ところてん製造業	6	
	乳類販売業	1,264		ふ製造業	1	
	食肉処理業	74	行商条例 ^{*2}	魚介類の行商	26	
	食肉販売業	1,087		アイスクリーム類の行商	3	
	食肉製品製造業	27		菓子製造の行商	3	
	乳酸菌飲料製造業	6		ところてんの販売	0	
	食用油脂製造業	12		削氷の販売	0	
				計	17,487	

*1 大分県食品衛生条例

*2 大分県食品行商取締条例

2 許可を要しない食品関係営業施設数

平成 31 年 3 月末現在、大分市除く

施設名		施設数
給食施設	学校	93
	病院・診療所	149
	事業所	26
	その他(保育園、幼稚園、老人福祉施設等)	573
食品製造業		958
野菜・果物販売業		1,931
そうざい販売業		1,895
菓子(パンを含む)販売業		2,575
食品販売業(上記以外)		3,362
添加物(法第 11 条第 1 項以外)の製造業		5
添加物の販売業		830
器具・容器包装又はおもちゃの製造業又は販売業		0
グリーンツーリズム施設		880
計		13,277

3 総合衛生管理製造過程承認施設

令和元年 12 月末現在

施設名	所在地	承認された食品	承認年月
(株)ジェイエイフーズおおいた	杵築市	清涼飲料水 (その他の清涼飲料水:殺菌後密栓・密封)	H15.2
		清涼飲料水 (その他の清涼飲料水:密栓・密封後殺菌)	H15.2
		清涼飲料水(ミネラルウォーター類)	H22.5
(株)日田天領水	日田市	清涼飲料水(ミネラルウォーター類)	H20.7
九州乳業(株)本社工場	大分市	乳(牛乳)	H15.3
		乳(加工乳)	H16.5

4 と畜場及び食鳥処理場

令和元年12月末現在、休止中、大分市除く

と畜場	大規模食鳥処理施設	認定小規模食鳥処理施設
1	0	20

5 大分県の食中毒発生状況

平成31年～令和元年

No.	発生場所	発生 月日	摂食 者数	患者数	死者	病因物質	原因食品	原因施設
1	大分市	3/22	4	4	0	クドア・セブテンブク タータ	ヒラメ刺身(推定)	飲食店(一般)
2	日田市	4/14	10	9	0	カンピロバクター・ジェ ジュニ	飲食店提供料理	飲食店(一般)
3	大分市	5/5	9	8	0	ノロウイルス	飲食店提供料理	飲食店(一般)
4	宇佐市	6/23	71	15	0	腸管出血性 大腸菌	飲食店提供料理	飲食店(一般)
5	大分市	10/25	183	33	0	黄色ブドウ 球菌	弁当	飲食店(そうざい)
6	大分市	12/14	92	57	0	ノロウイルス	飲食店提供料理	飲食店(一般)
計			369	126	0			

6 用語説明

OBSE (Bovine Spongiform Encephalopathy)

BSEは、伝達性海綿状脳症 (TSE) のひとつで、牛の脳の組織にスポンジ状(海綿状)の変化を起こし、起立不能等の症状を引き起こす遅発性(2～8年の潜伏期間)かつ悪性の中樞神経系の疾病です。原因は他のTSEと同様、十分に解明されていませんが、プリオンという通常の細胞タンパクが異常化したものが原因物質として有力視されています。1986年(昭和61年)に英国で発生し、日本においても平成13年9月にBSEに罹患した牛が発見され、平成24年12月末日までに36頭(死亡牛検査で確認された14例を含む)の罹患牛が日本国内で確認されています。

なお、平成13年10月から開始したと畜場でのBSEの全頭検査は、検査対象の見直しが行われ平成29年4月1日から健康牛の検査を廃止し、24ヶ月齢以上の神経症状等を呈する牛が検査対象となりました。

OGLP(Good Laboratory Practice)

「信頼性確保部門責任者」の項、「検査業務管理基準」を参照

OHACCPシステム(危害分析・重要管理点方式)

HACCP (Hazard Analysis and Critical Control Point)の略称で、「ハサップ」と呼ばれることもあります。HACCPシステムは1960年代に米国で宇宙開発計画が推進されていた際に、NASA (米国航空宇宙局) 等が宇宙食の高度の微生物学的安全性確保のため開発したものです。

HACCPシステムは、最終食品の検査によって食品の安全性を確保しようとする管理法ではなく、危害分析(HA)に基づき、重点的に管理すべき工程を重要管理点(CCP)として定め、その工程を連続的に管理することにより、製品ひとつひとつの安全性・品質を確保する手法です。

OTSE(Transmissible Spongiform Encephalopathy)

「伝達性海綿状脳症」の項を参照

○アレルギー物質(食物アレルギー)

食物の摂取により生体に障害を引き起こす反応のうち、食物抗原に対する免疫学的反応によるものを食物アレルギーと呼んでいます。この免疫学的な防御反応とは、体の中に異物(抗原)が入ってくるとこれに対して防衛しようとする働きにより、抗体がつくられるものです。その後の抗原の侵入に対して、この抗体がよい方向に働けば、病気の発症を抑えて免疫ができますが、アレルギー体質の人の場合、過敏な反応をして、血圧低下、呼吸困難又は意識障害等様々なアレルギー症状が引き起こされます。

○アレルギー物質を含む食品の表示(アレルギー表示)

アレルギー患者にとっては、自分の摂食するものの中に、自分の体が反応するアレルギー物質を含むか否かが判り、選別できるように情報提供を受けることが重要です。

食品衛生法によりアレルギー表示の義務づけられたアレルギー物質(特定原材料)は7品目(卵、乳、小麦、えび、かに、そば、落花生)ですが、指導により表示を推奨されたもの(特定原材料に準ずるもの)が21品目(あわび、いか、いくら、オレンジ、カシューナッツ、キウイフルーツ、牛肉、くるみ、ごま、さけ、さば、大豆、鶏肉、バナナ、豚肉、まつたけ、もも、やまいも、りんご、ゼラチン、アーモンド)となっています。

なお、えび、かには平成20年6月3日に特定原材料に追加されました。

○遺伝子組換え食品

「組換えDNA技術」を利用してつくった農作物や微生物を使った食品のことです。組換えDNA技術を応用した食品は、農作物と組換え体そのものを食べない食品添加物のようなものに分けられます。

平成28年12月26日現在で、厚生労働省が安全性を審査したものとしては、とうもろこし、ジャガイモ等の農作物が309品種、キモシン、 α -アミラーゼ等の食品添加物が25品目あります。

平成13年4月から遺伝子組換え食品の安全審査が義務化されたことにもない、遺伝子組換え食品が使われている食品は表示が義務化されています。

○医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律

医薬品、医薬部外品、化粧品、医療機器及び再生医療等製品（以下「医薬品等」という。）の品質、有効性及び安全性の確保並びにこれらの使用による保健衛生上の危害の発生及び拡大の防止のために必要な規制を行うとともに、指定薬物の規制に関する措置を講ずるほか、医療上特にその必要性が高い医薬品、医療機器及び再生医療等製品の研究開発の促進のために必要な措置を講ずることにより、保健衛生の向上を図ることを目的としています。

○衛生規範

厚生省食品衛生課長から各都道府県、各政令市、各特別区衛生主管部（局）長あてに食品の安全性確保の推進及び全体的衛生水準の積極的な向上を図るために通知された。

衛生規範には次のものがあります。

- ・「弁当及びそうざいの衛生規範」（昭和54年6月29日環食第161号）
- ・「漬物の衛生規範」（平成25年12月13日食安監発1213第2号）
- ・「洋生菓子の衛生規範」（昭和58年3月31日環食第54号）
- ・「セントラルキッチン／カミサリー・システムの衛生規範」（昭和62年1月20日衛食第6号）
- ・「セントラルキッチン／カミサリー・システムの衛生規範」（昭和62年1月20日衛食第6-2号）
- ・「生めん類の衛生規範」（平成3年4月25日衛食第61号）

○大分県食の安全・安心推進条例

食の安全安心は、行政だけでなく、食品の生産から消費に至るまでの全ての関係者が、それぞれの立場で努力するとともに、関係者の相互理解と協力のもとに進めるため、平成17年3月31日に公布されました。ふぐを安心して食べていただくために、この条例で取り扱う人及び施設に対する規定を設けました。

○大分県食品安全行動計画

平成17年10月に策定した長期総合計画「安心・活力・発展プラン2005」の「安心」戦略「安全・安心な暮らしの確立」を進めるための施策を計画的に推進するため、大分県食の安全・安心推進条例第7条に基づき向こう3ヶ年の計画を平成18年3月に策定しました。

この計画は5年ごとに見直しを行うこととしており、平成30年4月1日には平成30年度から令和4年度までの第五次計画を策定しました。

○大分県食の安全確保・食育推進本部

食に関する総合的かつ効率的な安全対策を推進し、食に対する県民の安全・安心を確保するため、副知事を本部長とし、関係する企画振興部、福祉保健部、生活環境部、商工労働部、農林水産部、教育庁及び警察本部の部長などをメンバーとする組織を平成15年9月1日設置しました。また、この本部の付議事項について協議するため、関係22課室長をメンバーとする幹事会を設置しています。

○大分県食品安全推進県民会議

大分県における食の安全安心確保を推進するため、広く県民の意見を聴取し、施策に反映することを目的として、消費者、生産・製造者、流通販売業者、学識経験者の20名で構成され、平成15年9月22日に設置しました。現在は大分県食の安全・安心推進条例に基づき、設置しています。

○大分県食中毒注意報発令要領

大分県では食中毒の発生を未然に防止するため、「大分県食中毒注意報発令要領」（昭和48年制定、平成24年度改正）を定め、食中毒が発生しやすい条件（食中毒注意報発令基準）に該当するとき食中毒注意報を発令しています。平成24年度からは、冬季に多発するノロウイルス食中毒を未然に防ぐため、新たに「ノロウイルス食中毒注意報発令基準」を定め、注意報を発令しています。

※食中毒注意報発令基準

「夏季食中毒注意報」

発令対象期間：6月1日から9月30日まで

注意報継続期間：発令時から48時間（その後は自動的に解除）

発令基準：次表のとおり

発令対象期間	発令条件			
	AかつBに該当する場合 またはCに該当する場合			
	A	B	C	
6月中	前日の最高気温 又は 当日の最高気温予想 28℃以上	前日の平均湿度 又は当 日の平均湿度予想 80%以上	前日までの最低 気温が3日連続 で25℃以上	
7月中	上中旬	27℃以上		90%以上
	下旬	30℃以上		80%以上
8月中	30℃以上	80%以上		
9月中	上旬	28℃以上		80%以上
	中下旬	27℃以上		90%以上

「ノロウイルス食中毒注意報」

発令対象期間：10月1日から翌年3月31日まで

注意報継続期間：発令日から翌年3月31日まで

発令基準：次表のとおり

発令対象期間	発令条件	
	DかつEに該当する場合	
10月1日から 翌年3月31日まで	D	E
		感染症発生動向調査における 感染性胃腸炎の定点あたり報 告数が2週間連続で前週と比 較して1.2倍以上増加

○大分県食品衛生指導基準

食品による危害の発生を未然に防止するため、食品衛生法に規格基準のない食品の細菌学的基準について衛生管理のための指標を定めたものです。食品の製造・加工、流通、販売における食品営業者の自主的管理及び行政の科学的食品衛生指導の推進を図ることを目的として、平成元年に決めました。対象食品としては、生食用魚介類やサンドイッチ類などがあります。

○大分県食品衛生条例

食品衛生法で定められた許可対象の営業のほか、県が公衆衛生上の見地から規制等を行う必要があると判断した営業やその施設基準等について定めた条例です。現在、つけもの製造業、こんにゃく製造業、ところてん類製造業、ふ製造業の4種類が許可対象営業として定められています。

○大分県食品行商取締条例

「食品行商」とは、店舗を設けずに一定地域を移動し、魚介類、アイスクリーム類、ところてん及び削氷を販売し、または菓子を製造する特殊な営業をいいます。この食品行商の許可にあたり必要な遵守事項を定めたものが大分県食品行商取締条例です。

○大分県食品製造業衛生管理マニュアル

効率的かつ効果的なHACCPに沿った監視指導を実施するため、平成14年度から総合衛生管理製造過程承認施設、乳処理業、清涼飲料水製造業14業種に対し作成したものです。

○大分県食品適正表示推進者制度実施要綱

関係法令に基づく食品の適正表示について責任を有する県内の食品等事業所において、食品の適正表示及び消費者へ正確な情報提供等を担う食品適正表示推進者の設置をすることにより、食の安心確保を図ることを目的として平成21年8月1日に策定しました。

○貝毒

貝が有毒プランクトンを摂取し、体内に濃縮させたもので健康被害の原因となるものをいいます。

毒は主に中腸腺（内臓）に蓄積されることが分かっています。貝毒には麻痺性と下痢性の2種類があり、これまで国内で知られている麻痺性貝毒プランクトンは、ギムノディニウム・カテナータム、アレキサンドリウム・カテネラ、アレキサンドリウム・タマレンセ及びアレキサンドリウム・タミヤバニッチの4種です。

大分県では、近年はギムノディニウム・カテナータムによる麻痺性貝毒の発生が懸念されています。

○外部精度管理調査

食品衛生検査の検査精度の維持向上や信頼性確保を図るために、国が指定する外部の公的検査機関で検査の正確さを評価してもらう調査のことです。

○かび毒

かびの第二次代謝産物で、人を含む高等動物の生体に急性あるいは慢性的生理的もしくは病理的障害をもたらす毒性物質群に対して名付けられた総称です。現在、300種類以上のかび毒が確認されていますが、人の食生活に関係するかび毒は20種類以上といわれており、その中でも特に重要と考えられるアフラトキシン、デオキシニバレノール、パツリンについて、食品衛生法に基づく基準値等が設定されています。

○グリーンツーリズム

農村漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律（平成6年制定）の定義では、「緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇運動」のことであり、ひとことでは「農村で楽しむゆとりある休暇である」とされています。

○残留動物用医薬品

動物用医薬品のうち抗生物質、合成抗菌剤などは、家畜の生産段階において、主として疾病の治療と予防を目的として使用されているものです。これら抗生物質などは、家畜に投与されてから、排出されるまでに一定の期間が必要です。医薬品の種類、投与量、投与方法によりその排出されるまでの期間は様々で

すが、医薬品が投与されてから肉、乳、卵などが出荷されるまでの休薬期間が不足した場合には、肉、乳、卵などに医薬品が残ります。これが、残留動物用医薬品です。

残留した医薬品は、ヒトの消化管内への影響が懸念されるため、残留基準を設定して、動物用医薬品の使用に際しての規制や食品中の動物用医薬品の残留検査を行うことにより、食品の安全性を図っています。(ポジティブリスト制度参照)

○残留農薬等

食品に残留する農薬等については、食品衛生法により残留基準が設定されています。しかし、残留基準が設定されていない農薬等については、残留している農薬等への規制がなく、その取り扱いが問題となっていました。これに対応するため、食品中に残留する農薬等のうち、残留基準が設定されていないものを一定量以上含む食品の流通が原則禁止されることとなりました。(ポジティブリスト制度)

この制度のもとでは、基準が設定されている農薬等で、その基準を超えて残留が検出された場合や基準が設定されていない農薬等が一定量を超えて残留する場合にはその食品の流通は禁止されます。

○(一社)大分県食品衛生協会

大分県内の食品関係事業者で構成される団体で昭和24年2月に設立し、昭和54年4月に社団法人大分県食品衛生協会、平成25年4月に一般社団法人へと移行しています。業界の自主管理体制の確立や食品関係業界における食品による衛生上の危害発生の防止を図ること等を目的として事業を行っている団体です。

○収去検査

食品衛生法に基づいて、食品衛生監視員が事業者などから無償で食品を採取し、定められた規格・基準等に適合しているかどうか調べる検査のことです。なお、食品の採取にあたっては製造者、販売者の同意を必要としないとされています。

○集団給食施設

食品衛生法の営業許可を必要としない学校、病院、保育所、社会福祉施設、老健施設等、特定多人数に対して継続的に食事を供給する施設のことです。

○証明書発行機関

「対中国輸出水産食品取扱登録施設」の項参照

○食中毒対策要綱

食中毒の発生を予防するとともに、食中毒又はその疑いのある事例が発生した場合に、関係部局及び国、自治体等関係機関とも連携し、適切な原因究明及び再発防止措置を講ずることにより、公衆衛生上の危害拡大を防止することを目的にその適切な方策について規定しています。

○食中毒の原因微生物

食品や飲料水を媒介して食中毒を引き起こす微生物のことをいいます。従来は細菌に限定して呼ばれていましたが、近年はウイルスも病原体として考えられています。食中毒は、感染の仕方や予防対策面から感染型と毒素型に大別されています。

※感染型食中毒

食品を汚染した生きた菌が食物や飲料水とともに経口的に取り込まれ、腸管内で細菌が増殖して食中毒症状を起こすことをいいます。細菌としては、サルモネラ、腸炎ピブリオ、病原大腸菌、下痢原性大腸菌、カンピロバクター、ウェルシュ菌、エルシニアなどがある。ウイルスとしては、ノロウイルス(旧SRSV)やA型肝炎ウイルスがあります。

※毒素型食中毒

食品内で細菌が大量に増殖し、産生された毒素が食品内に蓄積され、これを喫食して起きるものです。病原体としては、黄色ブドウ球菌、ボツリヌス菌、セレウス菌があります。

○食鳥処理施設

食鳥処理法に基づき、食鳥のとさつ、羽毛の除去、内臓を摘出する施設のことです。

※認定小規模食鳥処理施設

食鳥処理施設のうち、年間処理羽数が30万羽以下の施設が認定小規模食鳥処理施設です。当該施設では食鳥検査員による検査の代わりに、食鳥処理衛生管理者の確認により疾病等の排除を行っています。

○食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査に関する法律(食鳥処理法)

食鳥処理の事業について必要な規制を講じ、食鳥検査の制度を設けることにより、食鳥肉などに起因する衛生上の危害の発生を防止して国民の健康の保護を図ることを目的とした法律です。現在、法の対象となる食鳥は鶏、あひる、七面鳥その他一般に食用に供する家きんに限られています。

※中抜きとたい

食鳥とたいからその内臓を摘出したものをいいます。

○食鳥検査員

食鳥処理法に基づき、年間処理羽数が30万羽を超える食鳥処理場において食鳥の疾病排除等のために検査を行う職員で、獣医師であることが資格要件となります。食鳥検査員は、食鳥検査以外にも食鳥処理施設の衛生指導も行います。

○食鳥処理衛生管理者

食鳥処理を衛生的に管理するために各食鳥処理場に設置されている者のことです。資格要件は食鳥処理法に定められています。

○食品安全基本法

食品の安全性に対する国民の不安や不信を踏まえ、食品の安全性に関するリスク(危害)評価を行う食品安全委員会の設置を含む、国民の健康保護を目的とした包括的な食品の安全性を確保するための法律として平成15年5月に公布され、平成15年7月1日内閣府に食品安全委員会が設置されました。

○食品衛生法

食品衛生法は、飲食に起因する衛生上の危害の発生を防止し、公衆衛生の向上及び増進に寄与することを目的として、昭和22年に制定されたものです。有害食品などの製造販売等の禁止や飲食店営業などの34業種の許可及び営業の禁停止などの各種規制の規定が定められています。

○食品衛生監視員

食品衛生法に基づく食品営業施設の立入検査、食品や添加物などの収去及び食品衛生に関する指導などを職務とする公務員のことです。

厚生労働大臣の登録を受けた養成施設で所定の課程を修了した者、又は薬剤師・獣医師であることなど一定の資格要件が定められています。国(検疫所)、都道府県の保健所、保健所を設置する市の保健所等に配置されています。

○食品衛生監視機動班

大分県では、県下の5保健所に食品衛生監視機動班を設置し、専門的な監視・指導を行っています。主として、食品の製造施設、多種多様の食品が流通販売される施設及び給食施設などを重点的に立ち入りしています。

また、食品等の収去検査を定期的に行い、有害食品の排除や食品添加物、農薬等が適正に使用されているかをチェックしています。

○食品衛生管理者

食品衛生管理者は、食品衛生法に基づき、製造、加工の過程で特に衛生上の考慮を必要とする食品（食肉製品、魚肉ハム、ソーセージ等）を製造する営業施設に設置が義務づけられています。食品衛生管理者になるための資格要件も法律で定められています。

○食品衛生推進員

大分県は(一社)大分県食品衛生協会の指導員を中心に大分県食品衛生推進員に委嘱しています。食品衛生推進員は、食品衛生法第61条第3項の規定に基づき、飲食店営業の施設の衛生管理の方法その他の食品衛生に関する事項につき、都道府県等の施策に協力して、食品等事業者からの相談に応じ、及びこれらの者に対する助言その他の活動を行っています。

○食品衛生指導員

(一社)日本食品衛生協会が定めている資格要件です。

食品営業者の中から、食品衛生に関する規定の講習を受けて取得する資格で、営業者団体の自主衛生管理を推進するリーダー的な役割を担っています。

○食品衛生責任者

大分県の「食品衛生法に基づく公衆衛生上講ずべき措置の基準及び営業施設の基準を定める条例」で、営業施設ごとに食品衛生に関する責任者を設置することを規定しています。食品衛生責任者は、食品衛生に必要な知識の向上に努め、衛生管理に当たるとともに、製造、加工、調理、保存、販売等が衛生的に行われるよう努める等の責務があります。

○食品添加物

食品衛生法により、「食品の製造過程において又は食品の加工若しくは保存の目的で、食品に添加、混和、浸潤、その他の方法によって使用する物をいう。」と定義されています。我が国では、食品添加物は厚生労働大臣が安全性と有効性の両者を確認している「指定添加物」、天然添加物として使用実績が認められ品目が確定している「既存添加物」、「天然香料」や「一般飲食物添加物」に分類されています。天然香料、一般飲食物を除き、今後新たに開発される添加物は、天然や合成の区別なく指定添加物となります。

食品添加物の化合物としての安全性は、一般毒性、生殖毒性、発ガン性などについて主に動物実験により確認されます。

※ 食品添加物の使用基準

食品添加物ごとに、添加できる食品の種類や使用濃度、あるいは使用目的や使用方法を限定したものです。

○食品表示法

食品を摂取する際の安全性及び一般消費者の自主的かつ合理的な食品選択の機会を確保するため、食品衛生法、JAS法及び健康増進法の食品の表示に関する規定を統合した、食品の表示に関する包括的かつ一元的な制度です。

○飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律（飼料安全法）

飼料及び飼料添加物の製造等に関して規制等を行うことにより、飼料の安全性の確保及び品質の改善を図り、公共の安全の確保と畜産物等の生産の安定に寄与することを目的とした法律で、一般には「飼料安全法」と呼ばれています。

主な内容としては、飼料及び飼料添加物の製造、使用、保存、表示の方法や成分の規格が定められている他、製造業者・販売業者・輸入業者は農林水産大臣または県知事に届け出なければならないことなどが規定されています。

この法律の対象となるのは下記の動物です。

- 1 牛、豚、めん羊、山羊及びびしか
- 2 鶏及びうずら
- 3 みつばち
- 4 ぶり、またい、ぎんざけ、こい（食用）、うなぎ、にじます及びあゆ等

※ 飼料添加物

飼料安全法において「飼料添加物」とは、下記の用途に供することを目的として飼料に添加（混和）されるもので、農林水産大臣が農業資材審議会の意見を聞いて「省令」で指定するものを言います。

- 1 飼料の品質低下の防止（防かび剤、抗酸化剤、粘結剤、乳化剤、調整剤）
- 2 飼料の栄養成分その他の有効成分の補給（ビタミン・ミネラル・アミノ酸・色素）
- 3 飼料が含有している栄養成分の有効な利用の促進（合成抗菌剤、抗生物質、着香料、呈味料、酵素、生菌剤、その他）

なお、「飼料添加剤」は疾病の予防又は治療する目的で飼料に添加されている動物用医薬品であり、「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」により規制されています。

○信頼性確保部門

食品衛生法により、都道府県が設置する食品衛生検査施設にはG L Pの導入が義務づけられ、検査データの信頼性保証を確立しています。信頼性確保部門では、県下4施設に対して内部点検と内部精度管理の実施（検査精度の確認）・外部精度管理調査結果の確認など、各検査施設の検査内容の信頼性を保証する業務を行っています。

※ 検査業務管理基準（G L P : Good Laboratory Practice）

- (1) 誰がどこで検査しても同じデータが得られるために検査方法の明確化を行う。
- (2) 検査をする人は作業手順書どおりに作業を実施し、検査の各部門・区分ごとに責任者を設置して検査体制を明確化する。
- (3) 検査が適正に実施されていることを確認するため、定期的に内部・外部精度管理を実施する。

※ G L P規制の歴史

試験検査機関にG L Pが導入された発端は医薬分野で、1960年に西ドイツの製薬企業が開発した睡眠薬サリドマイドを服用した妊婦が出産した新生児に、特徴ある奇形が発生した事件であります。この事件を機に、世界各国の医薬品規制当局は新医薬品の認可申請に対し、発ガン性や毒性等の様々なデータを要求するようになりました。

この状況の中で問題となったものが、規制当局に提出される各種のデータは適性に試験され、かつ、十分な信ぴょう性を有しているか否かでありました。

そこで、検査機関でのデータが適正に試験され、十分な信ぴょう性を有するものになるために導入されたものがG L Pです。

○成分規格

食品衛生法に基づき、厚生労働大臣が公衆衛生の見地から、販売の用に供する食品の成分を定めた規格をいいます。

○総合衛生管理製造過程承認施設

平成7年（1995年）に食品衛生法が改正され、総合衛生管理製造過程による食品の承認制度がスタートしました。

この制度は、特定の食品の製造又は加工業者が当該食品の製造又は加工の方法及びHACCPシステムの適用手順を骨子とした衛生管理の方法について記載した総合衛生管理製造過程の実施計画書を申請書とともに厚生労働省に提出し、厚生労働大臣が内容を審査したうえで承認するものです。この制度により承認された施設のことをいいます。

○体感型研修

従来の一般的な座学形式の研修ではなく、体を使って体験したり、ワークショップ（共同作業）を通じて行う研修のことです。

○対EU輸出水産食品取扱認定施設

水産食品をEU諸国に輸出する場合には、取扱施設が認定を受けることと衛生証明書の添付が必要となります。厚生労働省が関係事業者の遵守すべき施設の構造設備及び衛生管理基準を定めており、自治体が国と協議の上、この基準を満たしていると判断される施設を認定することとなっています。

○対米輸出水産食品取扱認定施設

水産食品を米国に輸出する場合には、製造・加工施設が米国の規定する衛生管理基準を満たしたものでなければなりません。衛生管理基準を満たしているか否かの判断は、自治体が国と協議の上、認定することになっており、書類審査、立入り検査により認定することになっています。

○腸管出血性大腸菌

大腸菌は、その名のとおりヒトや動物の大腸内にいる細菌です。ヒトに無害なものが多いのですが、中には胃腸炎を起こす大腸菌があります。大腸菌にはO26やO111、O157など多くの種類がありますが、特に、ベロ毒素を産生し、出血を伴う下痢を起こすものを腸管出血性大腸菌と呼びます。腸管出血性大腸菌に感染しても症状が出ない場合もありますが、多くは腹痛や下痢を起こし、重症になると出血を伴う下痢の後、脳症、溶血性尿毒症性症候群や血栓性血小板減少性紫斑病と呼ばれる病気を起こすことがあります。

この腸管出血性大腸菌は、牛などの動物の大腸内におり、加熱不十分な食肉や調理過程で食肉に接触した食品、糞便や生活排水で汚染された水、患者や保菌動物との接触などが感染の原因となりますが、熱に弱く、75℃で1分以上加熱すれば死滅します。また、大腸菌は市販の消毒薬で殺菌できますので、手や調理器具、調理台を消毒すれば感染防止に有効です。

○伝達性海綿状脳症(TSE)

BSEなどの未だ十分に解明されていない伝達因子(病気を伝えるもの)と関係する動物の病気で、TSE (Transmissible Spongiform Encephalopathy)といわれます。

○登録検査機関

検査ニーズの増大に対応するため、県の収去した食品等の試験に関する事務を登録検査機関に委託することができます。登録検査機関は一定の要件を備えたうえで、国（厚生労働省）の登録を受けた検査機関です。大分県では、野菜等の残留農薬検査、穀類等の遺伝子組換え検査を委託しています。

○毒劇物等を原因とする食中毒対策要領

毒劇物等を原因とする食中毒の発生に際し、県、県警察本部及び医療機関が連携し、患者の人命の救助及び被害の拡大を防止するための必要な事項について規定しています。

○と畜検査員

と畜場法に基づき、と畜場においてとさつ、解体される獣畜の疾病等の排除のための検査を行う職員で、獣医師である資格要件があります。と畜検査員は、と畜検査以外にと畜場の衛生指導も行います。

○と畜場法

昭和28年に公布された法律で、と畜場の経営及び食用に供するために行う獣畜の処理の適正の確保のために公衆衛生の見地から必要な規制その他の措置を講じ、もって国民の健康の保護を図ることを目的としています。

なお、と畜場とは、食用に供する目的で牛、馬、豚及びめん羊及び山羊をとさつし、又は解体するために設置された施設で、大分県内には1カ所（豊後大野市）あります。

○と畜場法の衛生管理責任者及び作業衛生責任者

衛生管理責任者はと畜場の衛生管理の保持のためにと畜場の構造設備を管理する者で、作業衛生責任者はと畜場における獣畜のとさつ又は解体を衛生的に管理する者のことです。それぞれの資格要件はと畜場法に定められています。

○認定小規模食鳥処理施設

「食鳥処理施設」の項参照

○農林物資の規格化等に関する法律(JAS法)

農林水産物等の生鮮食品、加工食品等の品質や形状、寸法、量目、包装等の基準を定めた法律で、通称「JAS法」と呼ばれています。

○農薬取締法

昭和23年に制定されました。農薬について登録の制度を設け、販売規制等を行うことにより、農薬の品質の適正化とその安全かつ適正な使用の確保を図り、もって農業生産の安定と国民の健康保護に資するとともに、国民の生活環境の保全に寄与することを目的とした法律で、その主な内容は、①製造業者及び輸入業者の農薬登録等の規制、②農薬の販売等に関する規制、③農薬の使用に関する基準の設定等です。

なお、農薬取締法に基づく検査を行う機関として独立行政法人 農林水産消費安全技術センターがあります。

○フェイスブック

インターネットを利用した情報共有や交流の場のこと。

大分県食品・生活衛生課フェイスブックページ【<https://www.facebook.com/oita.shokuhin>】

○拭き取り検査

食品ならびにそれらを取り扱う器具や器材や従事者の手指などを滅菌水等で濡らした綿棒で拭き取り、細菌検査を行うことです。見た目の清潔さと細菌的衛生とは異なるため、その違いを知り、食品やそれらを取り扱う器具等の衛生的管理をすすめるために有効な手法です。

○不当景品類及び不当表示防止法(景品表示法)

商品や役務（サービス）の取引に関連する不当な景品類及び表示による顧客の誘因を防止するため、独占禁止法の特例を定めることにより、公正な競争を確保し、もって一般消費者の利益を保護することを目

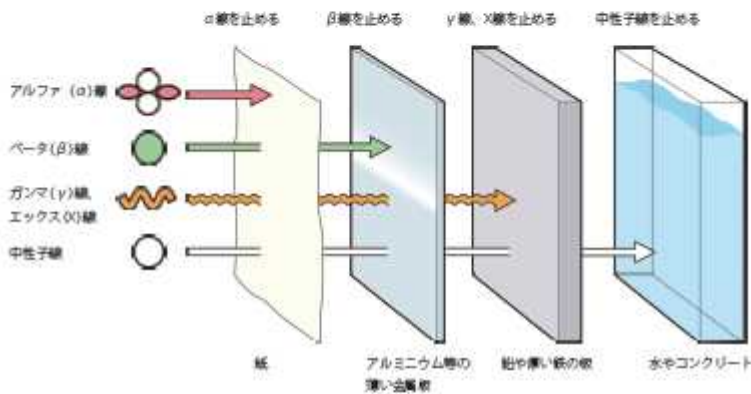
的としています。

景品類の最高額や総額の限度額、また、内容についての不当表示、取引条件についての不当表示等の基準を定めています。

○放射線、放射能、放射性物質(消費者庁 食品と放射能Q&Aより抜粋)

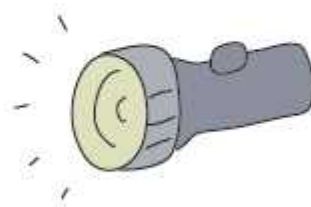
- 1 「放射線」は物質を透過する力を持った光線に似たもので、アルファ(α)線、ベータ(β)線、ガンマ(γ)線、エックス(X)線、中性子線などがあります。放射線はこれら種類によって物を通り抜ける力が違いますので、それぞれ異なる物質で遮ることができます。

放射線の種類と透過力



資源エネルギー庁「原子力2010」

- 2 この放射線を出す能力を「放射能」といい、この能力をもった物質のことを「放射性物質」といいます。懐中電灯に例えてみると、光が放射線、懐中電灯が放射性物質、光を出す能力が放射能にあたります。



- 3 一般に「放射能漏れ」とは「放射性物質漏れ」のことであり、放射線を出す放射性物質が原子力施設の外部に漏れ出すことです。

○ポジティブリスト制度

食品に残留する農薬等については、食品衛生法により残留基準が設定されています。しかし、残留基準が設定されていない農薬等については、残留している農薬等への規制がなく、その取り扱いが問題となっていました。これに対応するため、食品衛生法の一部が改正され、平成18年5月29日から、食品中に残留する農薬等のうち、残留基準が設定されていないものを一定量以上(0.01ppm:人の健康を損なうおそれのない量)を含む食品の流通が原則禁止されることとなりました。

この制度のもとでは、基準が設定されている農薬等で、その基準を超えて残留が検出された場合や基準が設定されていない農薬等が一定量を超えて残留する場合にはその食品の流通は禁止されます。

○無登録農薬

農薬は農薬取締法により、登録を受けなければ、製造・加工又は輸入してはならないと規定されていま

す。無登録農薬とは国の登録を受けていない農薬のことで、特定防除資材を除き販売、使用できません。農薬の安全性は登録された農薬について定められた使用法を遵守することで確保されます。

○有毒魚介類

ドクサバフグなど筋肉中にもフグ毒を有するフグ類や、ドクカマスなど熱帯から亜熱帯海域に生息する魚類のうちシガテラ毒（致死率は低く、中毒症状は神経系障害、消化器障害、循環器障害と様々です。）を持つ魚類などがあります。

○有毒植物等

トリカブトなど呼吸麻痺を起こすもの、ドクゼリなどけいれんを起こすものなど有毒な植物は古くから知られており、そのほか毒きのこがあります。

ヒトに何らかの有害作用を及ぼす毒きのこは約100種類存在しますが、症例として報告されている毒キノコは約50種類です。